

# 成田に初めて眼科医院を開業 印旛市郡医師会の発展に尽くし 学校医としても長年貢献する

## 近代眼科医療の 先端技術を駿河台で学ぶ

「今日だけは怒るな、心配するな、感謝して、業に励め、人に親切に」と医者には珍しい座右の言葉を診察室に掲げ、患者をこの上なく大事にする医師がいた。

山崎一雄は、明治35年(一九〇二)8月2日、印旛郡永治村浦部(現印西市浦部)1944番地に父興作、母やすの間に「男三女の長男として生まれた。山崎家は浦部では18代、300年から続く旧家で地主であった。

一雄は、永治小学校を卒業すると成田町に寄宿して成田中学校(現成田高校)に入学した。同期生には俊才が多く、後の肩書きでも京成電鉄副社長となった福田郁次郎をはじめ、富里村長の石井美雄、下総町長の若立源一郎、西遠女子高校長の岡本(旧姓若命)喜郎



山崎一雄(やまざき いちお)

印西市に生まれ、成田中学校(現成田高校)を卒業する。昭和6年幸町に眼科医院を開業し、戦後印旛市郡医師会の初代会長として活躍する。校医として奉仕活動を続ける傍ら、学校保健会を設立した。

鈴木産婦人科院長の鈴木藤吉、歯科医の竹村秀寿、埴生神社宮司の宮崎広則らの人材がいた。一雄は大正9年に同

中学を卒業後、新潟医科大学専門部(現新潟大学医学部)に進んだ。大正13年(一九二四)3月、同校を

卒業。弁護士であった叔父の板倉永助

の紹介で、駿河台の井上眼科病院(第7代院長井上達一)で修業を始めた。

井上眼科病院は、日本近代眼科の鼻祖といわれた初代井上達也が明治14年に創立し、今日まで120余年の歴史をもつ眼科病院で、当時としては先駆

的な医療を行っていた有名病院であった。ところが、一雄がこの病院に入っ

半年後、ほかの医師たちがストライキを始めてしまい、そのためか一雄は20代の若さで副院長(大正14年4月)を務める破目になった。

しかし、一雄はこの困難を乗り切り、患者の面倒もよく、院長外遊の折は院長代理を務めます。病院長の名声を上げた。院長の井上は、東大医学部を出て、海外でも研さんを重ね、医師としては抜群の人であったが、何か事



印西市浦部にある生家

が起きると直ぐ部下をしかりつける癖があり、ある時、一雄が朝から晩まで院長に怒鳴られた回数をももしたところ、数十回に達したという。一雄はとても動まらないと辞表を出そうとしたら、途端に給料がアップになり、退職を思いとどまったといったエピソードもあった。

## 昼夜を問わず 患者のために尽くす

大正13年11月25日、一雄は木下町別所(現印西市別所)の板倉よしを迎えて結婚した。2人の間には長男義人、次男登、長女久和子、次女孝子、三女良子と「男三女の長女が生まれた。

昭和6年4月15日、一雄は浦部の父の死去に会い、学生時代に縁のあった成田に来て幸町461番地に眼科山崎一雄病院を開業した。開業当初、かつての勤務先であった井上病院の患者が、



しかし、一雄は創設期の医師会長として、年1回から月1回への定期的な会議の設定、医師としての研究会の

一雄を慕って成田まで治療に来たが、義理堅い一雄は恩師の病院の患者を引っ張ることは出来ない」と報酬を受け取らず、自然と患者の足が遠のくように心配りをしたという。

当時、成田町には眼科の開業医が少なく、患者は日増しに増え、近在の町村からも患者が多数殺到する有様であった。

そのため、一雄は午前5時に起きて病院を開き患者の希望に応じて診療を開始し、手術の日は午前2時に起きて準備に入り、4時には手術に入るといふほどであった。

長期の診療を必要とする遠隔地の患者のためには、近所の民家2軒を借り受けて、食事を提供し宿泊、滞在もできるといふ便宜も図った。当時は交通

事情も悪く、この入院施設を利用する患者の数は多い時には20人近くに達した。

### 医師会の発展に奮闘し 学校保健会を設立

昭和22年11月、戦後の医療改革の中で一雄は推されて印旛市郡医師会の初代会長となった。以来、昭和27年3月まで、一雄は医師会の充実発展に大きな役割を果たした。

ある時は、社会保険の医療費の設定に自宅を提供して会食を行った席で、医師会の単価を一方的に引き下げる話を耳にし、その理不尽な話に怒った一雄は持ち前の柔道の太外刈りで担当者を投げ飛ばすという事件を起こした。

またある時は、農地法を楯に新規の開業医の土地取得を困らせるボス的な農地委員と渡り合っ、相手を承服させたといふ武勇伝もあった。(印旛市郡医師会史より)。

開催にも取り組み、着実に会組織の基盤を固めていった。

一方、一雄は、母校の成田高校の校医を昭和29年4月から52年3月までの23年間を務め、成田小学校で昭和9年4月から47年3月まで、成田中学校で昭和29年4月から47年3月まで校医を、成田幼稚園で昭和30年4月から52年3月まで園医を、成田学園で昭和7年4月から47年3月まで無報酬で園医と診療も引き受けていた。

また、郷里の母校、永治小学校には昭和10年4月から50年3月まで校医を務め、教育施設にも多額の寄付を行っていた。

こうした多数の学校にいずれも数十年にわたる校医としての奉仕活動を続ける一方、成田市では全国に先駆けて学校保健会を設立し、その推進力となり初代会長も務めた。

医師会においても印旛市郡医師会長、県医師会代議員、日本医師会代議員を務め、医師会を通じて日本の医療の改革向上にも寸暇を惜しんで貢献した。

### 患者に慕われ 生涯眼科医

大野政治(成田市文化財審議委員)は患者の一人として次のように語って

いる。

「昭和15、16年ごろ急性結膜炎で先生の病院に通っていたとき、先生は常に温顔で患者を診察されていた。ある日のこと、目を真っ赤にはらした10歳前後の子どもを連れて母親が診察に来た。先生は「いやだ。いやだ」と泣き叫ぶ女の子を引きずるようにならずに座らせ、母親に「しっかりおさえよ、今治さなければこの子の眼はつぶれてしまつぞ」と厳しくしかって治療にあたった。その態度に周囲の患者は「様になびっくりしていたが私はその時、初めて『鬼手仏心』という一雄先生の医師としての心に触れた思いがした」

「私のオヤジは88歳になって、週のうち金、土、日の3日間、患者を(7、8人のファンだけが)治療している」と山崎舞人著『眼科三代 眼と健康』に書かれているが、こうして老境になつても働ける喜びを一雄は

捨てられし大根谷間で花盛り  
という句に託して患者で親交のあった高柳正平(郷土史家)に贈っている。

こうして晩年に至つても各界に活躍してきた一雄であったが、平成12年2月19日、99歳の長寿を全つし他界した。後継者の義人、孫の直樹も開業医となり医院三代を見届けての大往生であった。内閣より従六位勲五等瑞宝章が贈られている。(文中敬称略)